

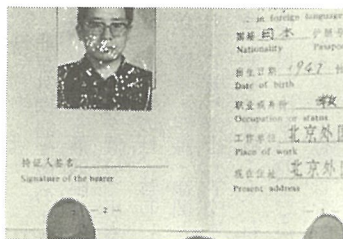
壁、壁、さらにまた壁

名和 又介



北京外国語学院の西校門

北京外国語学院の校門を初めてくぐったのは、去年の四月一日だった。校門脇には校衛隊(門衛)がいて、門の開け閉めをし、出入りする人をチェックしている。見慣れぬトラックやタクシーが来ると必ず身分証の呈示を求め、確認してからでないと言われ、門を開けない。私自身も顔を覚えられ、何度か身分証の呈示を求められた。私は外国人教師待遇なので、一年間の居留証と工作証を与えられていた。これが身分証の代わりになる。



居留証の一部

学生は学生証を、教職員は身分証を見せる。(身分証は中国語でも身分証だが、多くの人は日本統治時代に使った良民証という言葉を用いている。)身分証は常時身につけていなければならない物のようである。大学の出入口でも度々身分証の呈示を求められた。付近の友誼賓館(ホテル)に入る際に門衛に呼び止められたり、大通りを横断した時、乗っていた自転車の鑑札の有無を警察に調べられたり。日本では身分証明書の類は持ち歩いた試しがなく、中国でもその習慣は直らなかった。相手は私が外国人と分かると、いつも大目に見てくれたようである。それ

でもいくらかは不愉快に思つて、その出来事を中国人の教師に話したことがある。その教師は私に多少同情してくれてから、彼が日本にいた時、何度も警察から外国人登録証の呈示を求められたことを淡々と話してくれた。日本の警察官が恐くて仕方がなかったと彼は言つた。在日朝鮮人やアジア系留学生に対する日本政府の取り扱いを見れば、彼の恐怖も分らないではない。中国では中国人に厳しく、外国人に寛大である。日本では日本人に寛大で(？)、外国人に厳しい。更に敷衍してみると、中国政府は国民を管理できないが故に厳しく対処し、外国人を管理できるが故に寛大に対処しているのではないか。国民を信用していないから、一罰百戒としての公開処刑を度々行う。天安門事件直後の北京・上海での処刑はその典型であり、諸外国からの強い抗議に、中国政府はさぞ驚いたことだろう。(いつものことなのに、今回は又何故抗議されるのだろうか？と)面倒な外国人の対処は簡単である。VOAのアナウンサーの例のように、理由を付けて強制退去させればよい。一方、日本政府は国民を管理でき

るが故に寛大に対処し、外国人は管理できないが故に厳しく対処しているのではないだろうか。外国人といつても、先進国の外国人とアジア系の外国人は区別されているのかも知れない。日本での状況は、私の手な説明より、皆さんに考えてもらうことにして、再び話は校門に戻る。

大学の校地は、交通量の多い大通りをはさんで、東院と西院の二箇所に分かれる。西院は一辺五百メートルの正方形に近い形をしている。外国人専用アパートはこの西院の一番奥にあり、近くに留学生専用アパートと教職員住宅がある。西院の住民は千五百人を超えると思われるが、唯一の出入口がこの校門である。一日延べにして数千人の教職員と学生がこの門を出入りすることになる。とりわけ一時限目の始まる午前八時と昼食前後は人や車の流れが激しい。しかし、門衛は落ち着いたもので、校門が混雑しようがしまいがお構いなしに、見慣れぬ人物に身分証の呈示を求め、確認している。その間、人も車も停まったままである。この混雑は私の滞在していた間中繰り返された。今もなお繰り返しているに違

ない。

北京外国語学院のように周囲を塀で囲い、出入口を最低限度の一、二箇所にし、そこに門衛を置いて出入りする人や車をチェックするのは、珍しいことではない。単位(職場・組織・機関という意味)を構成する工場・会社・学校等はほとんど同じ構造である。材料こそ、石壁、レンガ塀、鉄柵と異なるものの、どこも長い塀で囲まれていることに違いはない。ホテルや公園も



北京天壇の廻音壁

例外ではない。出入口にたどり着くまでぐるりと回らねばならないこともある。例えば北京ホテル。タクシーで行くと入り口に止めてくれるが、歩いて行くと北京ホテルの一角に着きながら、なお入口まで二、三百メートルはかかる。頤和園（北京北西の公園）は南から行くと、公園の南端に着きながら、なお堀沿いに二キロは歩かねばならない。初めて訪れる学校や公園で入口を求めて彷徨したことは二度や三度ではない。延々と続く（？）堀沿いに悪態をつきながら、疲れた足を引かずった思い出がある。従って、中国の堀には多少の怨みがある。

用地、敷地を堀で囲う構造は、中国の城郭都市と関わりがあるのではないかと思う。城郭都市は中国北方に顕著に見られる建築様式である。現代漢語詞典で「城」の項を引いてみると、「1、城壁。2、城壁の中の場所。3、都市（郷と対の言葉）」とある。中国語で北京城といえば一般に故宫（紫禁城）のことではなく、2の意味で、城壁によって囲まれていた場所、もしくは3の意味で北京市のことを言う。今は城壁は

なくなり、地下鉄と第二環状線が走っている。地下鉄の環状線に乗ると、阜成門、西直門、徳勝門、安定門、東直門、朝陽門という名の駅を通るが、これらはすべて城内と城外を結ぶ西・北・東側の出入口であった。今なお原型を留めているのは徳勝門だけで、他は地名となつて残っているだけである。

城郭都市は北方民族の侵入から守るために造られたものだという。ユーラシア大陸

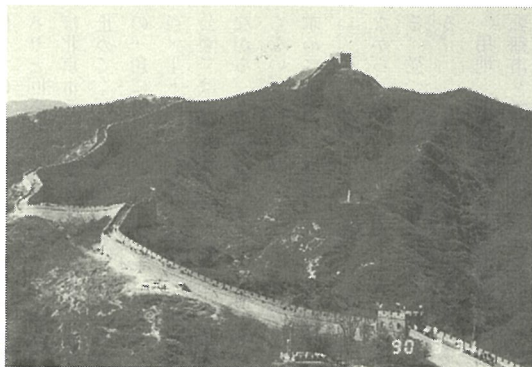


魯迅の旧居

に広範囲に見られる建築様式でもある。高い城壁で街を囲み、出入口は最小限度にして、そこに衛兵を置いて出入りする人をチェックした。朝早く門を開け、夜は門を閉めた。城郭都市・北京城の本丸が故宫（紫禁城）である。故宫は明代永楽年間十五世紀初頭に建てられた。永楽帝の動員できた物力・人力を投入してできた、理想的な建築だったと思われる。何度か見学して印象に残っているのは、周囲を取り巻く赤い壁



農家



万里の長城

であり、赤い壁で囲んだブロックの連なりである。皇族の邸宅も故宮を模倣したであろうと思われる。北京を代表する建築様式四合院も、四方にレンガ塀をめぐらし、奥を中心にコの字型にできている。出入口は正門のみである。魯迅や茅盾の旧居も典型的な四合院であり、彼らの住居は一番奥である。北京の農村でもそれは同じで、住宅

がコの字型の奥の塀と重なっている。故宮がモデルとすると、四合院や農村の建物はその簡略形といえようか。ここで私がこだわっているのは建築様式のことではなく、塀と出入口の問題である。中国人は、塀又は塀状の物によつて囲われていないと、安心できないのではないか、伝統的中国人はそのような構造にくつろぎを覚えるのではないかという憶測である。

憶測を憶測に終わらせないため、二、三の文献資料に当たってみた。すると、Oswald Siren の「*The Walls and Gates of Peking*」(一九二四年)に次のような言葉があるのを見出した。

「事実、万里の長城は、周囲を塀で囲む方式の構造物に対する中国人の最も典型的で揺らぐことのない根の深い信頼感の象徴である。」

万里の長城は北方民族の侵入を防ぐために築かれたもので、城郭都市と同じ目的を持つものである。しかし、その一部は春秋戦国時代以降の封建諸国家の国境に沿って築かれているので、事実上の国境線でもある。中国人の塀(壁)好きは、歴史的にも

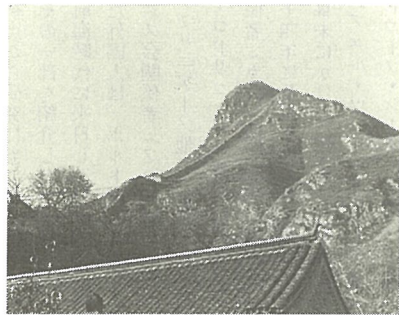
かなり遡ることができよう。

これに続く言葉も少し長いが引用する。

「壁、塀、さらにまた塀が、あらゆる中国の都市の骨組を造っている。壁は町を囲み、区画や屋敷に分ち、中国人の共同体のいかなる他の構造物よりも基本的な特徴をしるしている。周囲を囲む壁を持たないような現実の都市は中国にはなく、実際この状況は、中国人が同じことば「城」を都市と都市の壁の両方に用いるという事実によつて示されている。城壁を持たない都市などは存在しないのである。それはちょうど屋根のない家と同じように途方もないことなのであろう。これらの壁は省都や他の大きな都市にあるだけでなく、あらゆる共同体、小さな町や村にさえあるのである。」

著者 Siren (一八七九—一九六六年) はスウェーデンの美術史家・哲学博士で中国古代芸術の研究もある。

城壁は歴史的時間の経過に耐えて存在するものが多く、図説・写真版「中国の歴史」を開くと、その最初によく出てくる。畑の



万里の長城の一部（北京東部）

中に続く土の塀など…。殷の時代に早くも城郭の遺跡は発見されている。歴史上町や国が存在した時点で、城壁がセットになっていた可能性もあるようである。国や都市を表す邑という漢字の口は城壁を意味するという。藤堂明保の漢字語源辞典を引いてみよう。

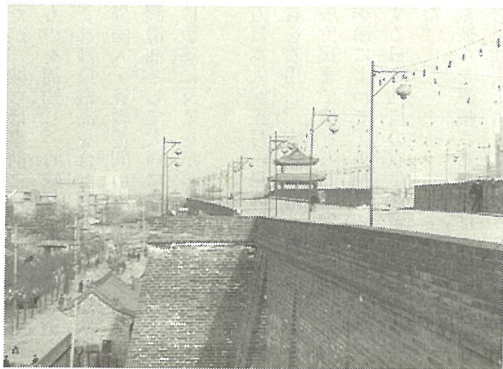
國 kuek→kuek（見徳 合一）「邦なり。口かこい十或声」（中略）大国・小国のような国statesの観念は、おもに春秋時代以後に生じた考えである。

邑 □印十人の会意。屈伏した人と、

その住む領域を示す□印とを合わせて、「支配下の住民の居住地」を表す。上古の緝部の字。

漢字の作りからして、城壁で囲われていると、町や国ではないと中国人は考えていたのかもしれない。「名は体を表す」という次第で、本物の町、本物の国にするため（当然現実的必要性に迫られてであるが）、中国人は莫大なエネルギーをかけて町の城壁を築き、万里の長城を築いてきたのだろう。

しかし、「屋根のない家と同じように城壁を持たない都市は存在しない」中国から城壁が消えた。北京の城壁は一九六〇年代末に撤去された。城壁に使われた瓦は防空壕を補強するため転用されたという。（その防空壕も一部は地下鉄や養鶏場、キノコ畑として利用される以外用に耐えなかったのではないかと想像される。）現在、中国で完全な城郭都市と言えるのは西安と平遥（山西省）など四都市でしかない。城壁は近代化の掛け声とともに消えたが、周囲を塀で囲うという伝統は今尚生きている。生きているどころか、近代的な装いをした工場やホ



西安の城壁

テルでさえ、その構造から自由ではない。一九二〇年代にSienが「壁、壁、さらにはまた壁が、あらゆる中国の都市の骨組をつくっている」といった状況が、今も変わることなく存在する。この壁は構造物としての壁であるとともに、中国の伝統という壁であり、中国の近代化の前に立ちはだかっている壁でもあるように思われた。

（大学文学部助教授）